

# たんぽぽ会報

令和3年10月

発行者  
たんぽぽ会  
(東京学芸大学  
幼稚園科同窓会)

〒184-8501  
小金井市貫井北町4-1-1  
東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎  
042(329)7813



## 『Yasama(やさま)の心で パラリンピック選手から学ぶこと』

たんぽぽ会会長 田村 秀子

今年度よりたんぽぽ会会長を務めることになりました、田村 秀子と申します。どうぞよろしくお願います。

昨年度より新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、たんぽぽ会も例年通りの活動ができない状況でしたが、学びの機会を止めないために知恵を出し合い、時代の変化に対応した、新しい試みにチャレンジしました。今回初めてのZOOM総会・研修会では、役員の予想を超えた人数から参加の申し込みがあり、大変に嬉しく、役員がLINEで連絡を取り合って準備を進めました。画面越しではありましたが、久しぶりに顔を合わせ、共に岩立先生のお話を伺うことができ、感動的なひとときとなりました。

たんぽぽ会のよさは、同じ幼稚園科で学んだ人たちとずっとつながっていられること、年代を超えて様々な人と研修を楽しめること、学ぶ楽しさやワクワクする気持ちをずっと持ち続けていられることだと思います。

困難な時代の中でもたんぽぽ会はしっかりと根をはり、皆が元気になる活動が続けていきたいと思えます。

さて、今年の夏は無観客で東京オリンピック・パラリンピックが開催されました。変異株による感染が増え、家で観戦した方が多かったと思います。その場に行かなくてもサーフィンなどの迫力ある映像が見られたり、園や学校から応援の動画を送ることができたり、スマホからコメントを送ることができたりなど、新しい形でのオリンピック・パラリンピックを体験することとなりました。開催については様々な意見がありましたが、選手たちが力一杯頑張る姿は大きな感動を与えてくれました。様々な国の選手が競い合った後、抱き合って健闘を讃え合う姿、失敗した選手に駆け寄り励まし合う姿、様々な障がいを乗り越え、最後まであきらめない姿などに、私も大きな感動と勇気を受けました。子供たちも様々な刺激を受けたことと思います。世界の多様な人々と互いに受け止め合い、共に生きる素晴らしさを感じ、様々なスポーツに親しんでくれたらと思います。

さて、パラリンピックで陸上七冠を目指したタチアナ・マクファデンさんは、小さい頃から腰から下が動かせず、自力では移動できない状態でした。でも車椅子のない孤児院で、逆立ちで動くことを思い付き、ずつと逆立ちで、どこにでも移動していました。そのことで上半身に筋力がつき、パラリンピックでの活躍に結びついたそうです。そのタチアナさんがいつも口ずさんでいた言葉は「Yasama」(ロシア語で「私にはできる」という意味)です。幼児期から子供たちに「自分にはできる」という気持ちをもたせていくことは、何より大切なことではないでしょうか？ 昨今では、難しそうなことには取り組もうとしなかったり、失敗するとすぐにやめてしまったりする子供の姿も見られます。うまくいかないことがあっても、落ち込んでも、この「Yasama」の心を持ち、自分なりに工夫したり、あきらめずに頑張ったりする子供を育てたいと思います。そして私たち大人も、この厳しい時代の中で、あきらめずに様々な困難と向き合っていきたいと思えます。

## 【大学より】

## 私の目から見た大学の近況

東京学芸大学准教授 平野 麻衣子

皆様、はじめまして。令和2年4月に東京学芸大学A類幼児教育教室に着任しました平野と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。大学の近況を私の紹介とともに綴らせていただきます。

私の専門は幼児教育学です。都内の私立幼稚園で保育者として勤務し、当時の園長先生のご指南により、大学院へと進学しました。

大学院では、指導教授のご指導の下、実践事例や現象を語り合い、多角的な視点から真を追求し、学問的背景や知識との関連において意味づけしていく過程を味わわせていただきました。具体的には、保育の中の「片付け」に着目して、子どもと保育者で織りなす展開を追いかけました。その中で、単なる生活習

慣形成に留まらない、根底に潜んで

いる重要な育ちとして「自己充実と他者との調和」を挙げました。「自己充実と他者との調和」を図ることは、

これからの社会において、より大事になると考えています。なぜなら、多様性を認め合う社会では、自らの主張や考えをもち表現していくことと同時に、自分とは異なる他者と対話し、しなやかに折り合いをつけないが共生していくことが必要だと考えるからです。

現在は「幼児教育学」や「保育・幼児教育課程総論」等の科目を担当させていただいております。お恥ずかしい限りですが、授業の度に学生から学びを返してもらっているような状態です。保育や教育を多角的に捉えられるようにするための工夫と

は何か、学生が自分ごとに引き付け、各々のよさが引き出されるような授業にするにはどうしたらよいか、保育や教育という営みの表面ではなく奥深いところを学生たちと語り合いたい、そのためには…という思いで、日々、試行錯誤、真剣勝負、省察の只中におります。

教職大学院の教職専門実習や学部教育実習では、たくさんの方の先生方にもお会いし、これから保育者になる学生を共に支えていくことの力強さを感じ、さらに保育者として学び続けていくための環境についても学ばせていただいているところです。

令和3年度、本教室には、21名の新たな学生が入学してきました。今年度の授業は、各自の感染対策、教室の収容人数による制限、アクリルボード板の設置等、対策を講じた上で対面での授業が再開されました。一方、履修者が多い科目や指導効果の観点から遠隔で行う科目もあり、学生たちは、対面での授業を受けた後、空き教室で遠隔授業を受ける等、

まさにハイブリッドな学びの形式に移行しつつあります。

昨年度は、私自身も大学に行く機会が少なかつたのですが、対面授業や附属幼稚園への観察実習等、本格的に東京学芸大学での養成教育を経験させていただくことで、実感も伴い、楽しさと共に、責任の重さも感じていきます。ふと目を窓に向けると、キャンパス内のケヤキ広場では、乳幼児の子どもたちの声が飛び交い、嬉々として遊ぶ様子、保護者の方が微笑ましく見守る姿とともに、学生同士語り合ったり、ひとり思索に耽ったりしている多様な光景があり、心許ない私に勇氣と癒しを与えてくれています。

多方面でご活躍されているたんぽぽ会の皆様には、学生の実習やボランティア等をはじめ、本学へのご協力を賜り、誠にありがとうございます。今後とも、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。皆様と直接お会いできる日を楽しみに頑張っ

## 令和3年度 たんぽぽ会 総会 研修会

—岩立京子先生を  
お招きして—

令和3年6月26日(土)、令和3年度たんぽぽ会総会が二年ぶりに開催されました。新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、今回初めてZOOMを使ってリモート開催として行いました。全国から83名の方に参加していただき、遠方からでも、子育て中でも参加しやすいリモート開催のよさを実感した総会及び研修会となりました。本学の水崎誠先生、平野麻衣子先生、山崎寛恵先生からも挨拶をいただきました。コロナ禍でお目にかかることが難しい状況ですが、画面越しでも幼児教育教室の先生方と対面することができた貴重な時間となりました。

総会では、令和2年度の事業及び会計報告、令和3年度の役員、事業計画案・会計予算案が全て承認されましたことをご報告いたします。なお、12年間会長を務めた永井由利子会長に替わり、新会長 田村秀子が承認されました。

第一回研修会では、東京家政大学教授(前 東京学芸大学教授)の岩立京子先生をお迎えし、「保育実践と心理学の交わるところー保育者の専門性への問いー」という演題でご講演いただきました。

講演では、これまでの歩みを振り返りながら、様々な方との出会いについてお話しくださいました。「人生の選択肢は(周りの)人々によって提供されるからこそ、人々との出会いや関わりが非常に重要」という言葉が印象的でした。また、岩立先生が大きな影響を受けた先生方との出会い、心理学との出会い、数多く携わられた研究論文についてなど、具体的なエピソードや

人望の厚さを改めて感じました。

研修会後には、今年の春卒業した方々の自己紹介タイムや期ごとの紹介タイムを設け、参加者の皆様に顔を映していただきました。同級生や先輩・後輩など、懐かしいお顔が映ると笑顔になったり手を振ったりし、久しぶりの再会に喜びを伝え合う姿がありました。

思い出を交えながら丁寧にお話をしてくださいました。研究者としての思いを伺う中で、特に心に残っている研究として、「海外での評価研究」「虐待」「園内研究での議論」などを挙げられました。園長として尽力された附属幼稚園の園内研究でのエピソードから、「保育者は専門性に対して自尊心をもち発信をしていくべき」との言葉もいただき、「保育者は実体験を実践研究として深めていくことができる」と幼児教育研究における大きな可能性も示してくださいました。

研究者としての歩みの中で、学生時代を含めると大半が本学で過ごした時間だったそうです。岩立先生の本学への特別な思い、幼児教育への情熱に触れることができ、多くの学びを得ることができました。

講演後にいただいたチャットでの感想には、在学当時を懐かしむ声や岩立先生のお話を聞くことができた喜びの声が数多く寄せられ、岩立先生の

たんぽぽ会の研修会は、今年度も年に二回実施します。秋の研修会もリモートで開催します。NPO法人減災教育普及協会の江夏猛史様を講師としてお迎えし、「子どもも自分自身も守る勉強会ーこれまでの防災教育に足りない減災の視点を学ぶー」というテーマでご講演いただきます。東日本大震災から10年が過ぎ、改めて防災・減災について考える機会としたいと思います。皆様奮ってご参加ください。

(文責 会報担当者)

〈特集〉

# 学芸大 幼稚園科 卒業生の 活躍

東日本大震災から十年

二十四回生

初瀬 玲子

(いわき市)

初めにこの場をお借りし、東日本大震災に際しまして東京学芸大学幼稚園科同窓会様より賜りました多大な義援金に御礼を申し上げます。いわき市立幼稚園18園にて園児用教材等購入させて頂いたいただきました。思いがけないご厚情に恐縮いたしました。大きく励まされた思い出でした。心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

東日本大震災からの10年間は、あつという間に感じますが、今も二つの強い感覚が鮮明に蘇ってきます。一点目は「私はこの時のために、幼稚園に勤めていたのかもいけない。これまでの経験を最大限に活かして子どもたちを守らなければ！」という園長としての強

い思い、二点目は余震頻発中に再開された新年度一学期を無事に終え、全園児が保護者と一緒に降園した後、膝の力が抜けて立てなくなってしまうときのことです。どちらもそれまで私が味わったことのない感覚でした。当時私が勤務していた「いわき市立西小名浜幼稚園」は、三年保育で園児数121名、位置は小名浜港から一キロメートル、そして福島第一原子力発電所から50キロメートルにありました。

3月11日、園児が降園し、全職員が職員室にいる時に突然体を支えきれない程の大きな揺れに襲われました。その後園庭へ移動、すぐに津波警報が発令され、同じ敷地内の小学校の四階へ避難し、頻発する大きな余震に右へ左へと身体を持っていかれながら、大型テレビに映る小名浜港の津波の恐ろしさや、コンテナや車、船などが次々と流されていく様子を信じられない思いで見つめていました。津波はその夜幼稚園の門まで到達、いわき市も甚大な被害を受け多くの保護者宅も被災しました。各家庭への安否確認、避難所訪問、行政との対応などの最中、福島第一原子力発電所が爆発、多くの家庭

が寸断された一般道をたどって、全国へ避難しました。物流は完全に途絶え、スーパーの棚は空っぽ、ガソリンスタンドには長蛇の列、12時間並んで給油し通勤した先生もいました。ライフラインは遮断され、我が家の水道復旧には一か月以上かかりました。

3月末に市より通知があり、4月6日の小学校入学式の午後に「修了式」を、翌日に「入園式」を挙行しました。ほとんどの家庭の方がいわき市に戻って来て、涙々の再会となりました。

新年度も余震は頻発、震度六弱が二日続けて起こり再び休園となり、翌週に再開します。放射能対策のために活動は制限され、安全な生活を模索し、全職員で知恵を出し合った保育に子どもたちの笑顔も戻ってきました。保護者もやるべきことが山積し「幼稚園に行っている時が唯一安心できる時間」との声も多くありました。子どもたちは津波や避難ごっこを繰り返し、震災当日のように雨が降ると怯える子も多く、園児や保護者のPTSDへの対応、防災計画の見直し、関係者合同の緊急避難訓練など、命と心を守る対策に努めました。

当時「いちご研究会」として一年間、学研教育出版社の「指導計画・指導資料」を執筆中で、翌年「子どもを守る防災BOOK」に他地区の園と共に震災の記録の一部を掲載していただきました。各地で起こる災害の映像を見ると今でも胸が締め付けられる思いがします。

幼かった園児たちは今、新型コロナのために、通常とは違った学校生活を余儀なくされています。人生の序盤で途方もない困難に次々と出会ってしまった子どもたち。その経験は人としての優しさや逞しさにつながっていったらいいと願っています。

皆様、どうぞ健康に留意されて、それぞれのお立場でご活躍いただきますよう心より祈念申し上げます。



いわき市を襲った津波の跡

「避難訓練2.0」

現場レポート

四十一回生

若草幼稚園園長 堂本真実子

(高知市)

2年前より、NPO法人減災教育普及協会の江夏猛史さんのご指導の下、避難訓練の見直しを図ってきました。その取り組みをお伝えします。

一 考え方を変える

「避難訓練2.0（避難訓練のアップデート）」とは、江夏さんが推奨されている避難訓練の考え方は、この中で最も大切なのは、考え方を変えることです。これまでの一般的な避難訓練では、「頭を守る」という一義的な命題にそって、机の下に潜ったり、部屋の真ん中でダンゴムシのポーズをとったりしてきました。まさかその上に天井が落ちてくるとは思ってもおらず、机が天井の重さに耐えるわけがないとも、ダンゴムシの身体を直撃しようとも想像していません。幼いころから繰り返してきたことが、実は短絡的で画一的で非現実的であったと理屈でわかったとき、目からウロ

コが落ちた気持ちでした。そもそも、頭を守れば命を守るわけでもなく、私たちは命を守るために、地震によって引き起こされる「災害」と戦うのだということ、江夏さんに教えていただきました。

したがって「避難訓練2.0」の出発点は、「何と戦うのか」という根本を見極めることです。これは場によって違います。想定されている最大震度、津波の有無、液状化の有無、命にかかわる危険物の有無などによって、動き方は変わります。ある命題から一義的方法に寄るのではなく、場の固有性や特殊性から考えること、これは、「遊び保育」そのものです。おそらく「避難訓練2.0」に対して、どの教育分野よりも理解が早く、実践に結びつけられるのが私たち保育者ではないかと思っています。そして、避難訓練を洗練させることは、生きる力を育むことそのものであり、私たちの仕事なのだと思います。

二 具体的展開

(一) ハード面へのアプローチ

まず最初に着手すべきは、ハード面の対策です。建物の耐震性、天井の強度にはじまり、ガラスに

飛散防止フィルムを貼ること、大きな棚の固定などは、訓練の仕方そのものを左右します。まさしく環境の構成が整っているかどうかです。ここに問題があると、現場に大きな負担を強いることになるので、何より優先されるべき事項だと考えます。

(二) 場の診断

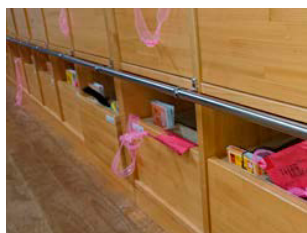
避難訓練の計画では、状況を設定し、場の診断を行います。例えば保育室で考えられる危険物は、天井や水まわりの棚、ままごとの棚でした。天井を避けることができるのは、壁際に取り付けてあるロッカーの傍です。そこでロッカーに身の安定を保持するためのバーを取り付けました。また、固定できるものは固定し、できないものは、避難の動線で乗り越えることにしました。

(三) 指導法の改善

「避難訓練2.0」に取り組む中で、一番変わったのは、「子ども自身が地震を理解すること」に軸足を置いたことです。そこには、子どもが自分で分かっている動いてくれないと、全員の命を救えないという実感がありません。二歳児にどうやって地震を伝えるのか悩み、実際にブルーシートに乗せて揺ら

してみました。すると「揺れる」が分かり、そこから「安全姿勢」が必然として分かり、実際には「動けない」ことがすぐに分かりました。そこで大人も含めて全員で体験し、そこから避難行動に至る理屈を実際の写真を見せながら伝えました。素早さに価値を置いて焦らせるよりも、「分かること」「分かって動くこと」「考えること」を真ん中にして避難訓練を進めていくと、子どもは納得して動きます。家のことも心配する子どもが増え、現実味を帯びた避難訓練に成果を感じます。

これからも試行錯誤は続きますが、「避難訓練2.0」は、子どもたちの生きる力を育む大きな機会であり、私たちの教育力も鍛えられます。保育現場からウェイブを起こし、現実的で実践的な避難訓練の実現を目指せたらと願っています。



ロッカーに取り付けたバー

## 各期のたより

## ふたば会

二十三回生 宮間 敬子

「久しぶり、元気だった？」と再会と同時にタイムスリップ。えみちゃん、みっちゃん、のんちゃん、テンコちゃん…容姿はともあれ(失礼)呼び合う声は皆、学生時代のままです。

23回生は、授業料月額1,000円最後の学生(後期からは3,000円)パソコンも携帯もなく、レポートも卒論も手書きの時代でしたが、合唱コンクール優勝で団結力はアップし、笑いと活気に満ちた仲間たちでした。幹事は名簿順に三名ずつで第一回クラス会を一九七九年開催。20代、30代は順調につき、40代は皆忙しく順不同で。50代は宿泊可能な会場を選び、60代の今、話題は介護と健康のみ。個性豊かな29名で昭和28年生まれが多いので、『ふたば会』と命名し、45年間大切に育み、21回の歴史へ成長させてきました。まもなく70代。ふたば会はどんな風景かしら。楽しみ!!

## 「心の叫び」

四十三回生 川越 裕子

私たち43回生の科室には「心の叫び」というノートがありました。どうでもよいような話や悩みなどを思うがままに書き、そしてそれを読み、同期の思いを共有していました。

早いもので卒業からほぼ四半世紀が経とうとしています。都内に、地方に離れ離れになり、さらに、幼児教育に何かしらの形で携わる者、子育てで真っ最中の者、とおかれている状況も様々ですが、「心の叫び」のノートは今もSNSになり、コロナ禍でも近況報告や『お悩み相談』は続いています。子育てのこと、仕事の悩み(愚痴?)など、内容こそ変わりましたが、思いを共有しながら変わらず仲良くしています。今はコロナ禍でなかなか会うことは叶いませんが、状況が変わったら『すぐに』みんなであって直接話ができるようにしたいです。企画しますね、待っていてください、43回生!

## たんぽぽ会のホームページでも情報発信中!

東京学芸大学のホームページにたんぽぽ会のページがあります。ぜひご覧ください。



## &lt;たんぽぽ会のメーリングリストができました!&gt;

新しくメーリングリストを作りました。登録すると、研修案内等、たんぽぽ会からの情報が届きます。登録したい方は下記のメールアドレスまで お名前と何回生か(または卒業した年)を添えてお申し込みください。

tampopokai.tgu@gmail.com

## &lt;会費納入のお願い!!&gt;

たんぽぽ会の維持運営のため、会費のお振り込みをお願いします。12月末日までにお振り込みください。

会費 2,000円

振込先 三菱UFJ銀行 小金井支店

普通口座: 0427768

口座名: 東京学芸大学幼稚園科同窓会

会長 田村 秀子

※ 振込人には何回生かの数字とお名前を入れてください。

## 《インフォメーション》

## ★令和3年度秋の研修会

令和3年11月27日(土) 14:30～(オンライン開催)

## ★令和4年度たんぽぽ会総会・懇親会

令和4年6月25日(土) 予定

東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎にて

## ★令和3年度卒業論文発表会

令和4年1月29日(土) 9:00～

開催方法は未定

## 令和3年度 たんぽぽ会役員

会長 田村 秀子(29回生)

副会長 小澤 明子(30回生)

宮本 実利(34回生)

庶務

研修 青山 伸子(36回生)

女屋 旬子(36回生)

大川 美紀子(44回生)

澤田 亮(51回生)

会報 川崎 暁子(46回生)

山本 遼(60回生)

事務局 町田 理恵(51回生)

八木 亜弥子(48回生)

会計 船水 智恵子(58回生)

武田 恵梨奈(61回生)

会計監査 東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎

園長・副園長

監事 井口 美恵子(21回生)

永井 由利子(21回生)